

★日立沖は水深30
~50メートル前後
を狙うため縦の釣
りが主流となる



食ってくるときはみんな一斉に
バタバタッとアタるけど、
それほど長くは続かない。
難しい日に当たっちゃった
みたいだね。



◀釣れるアジのアー
レンジは30~35セ
ンチ前後

「あーっ！」という嘆息は、さねばなるまい。取材班が緊張の面持ちなのは、当地で初めて体験する未知の釣りに対しての期待と、結果を出さねばならないという義務感とが入り交じったことだった。その緊張は、しかし、1投目でいきなり歓喜に変わった。水深30メートルの根周りから釣りが開始されると、ヨッシーが着底と同時に良型のメバルを掛けたのだ。「いわゆる着トんだよ」とヨッシー。「おいおい、この海域、すこいんじゃ……」みんながそう言いかけた2投目、今度はメバルとは明らかに異なる強い引きで、ヨッシーの竿が大きく曲がった。「アジだ！これはデカイ!!」叫ぶヨッシー。チリチリとドラグ音が響く。ヒザを曲げて強い引きをいなし。「コッチも食った！」ヨッシーとダブルで竿を曲げているのはタカハシゴーだ。二人とも、チョンチョンチョンと細かく1メートルほど誘い上げてからスッとソフトルアーを止めるスタンダードな釣り方で、いきなり良型とおぼしきアジを掛けたのである。そして、

「あーっ！」という嘆息は、ほとんど同時だった。両者ともにバラしてしまったのだ。突然のギガアジ(と思われる良型)の来襲に、総員ガチで放心状態だった。「なんだ、この海域は……」「どうなってるんだ……」2尾を同時にバラしてしまった影響からかアタリは遠のいたが、ツリガチ取材班のワクワク度は高まるばかりだった。「キタッ！」声を上げたのは、またしてもタカハシゴーだ。「うおっ、ヤバイヤバイ」と言いながらも今度は慎重にリールリングして、釣り上げたのは待望の良型アジだった。尺は余裕で超えている。「この釣り、すげえ……」

言葉を失う。よりによってタカハシゴーが1尾目。しかもデカイ。いったいどうなっているんだ……。呆気にとられるヨッシーとイチロウをよそに、饒舌なタカハシゴーである。「アタリは意外と小さいよ。モゾモゾッという感じだった。それを見抜いてバシッ！気持ちよくく合わせが決まったね。いやあ、すんげえおもしろい！」最近のツリガチ取材では1尾目を釣りガチなタカハシゴー。「すんげえおもしろい」とは、ライターとは思えない貧弱な語彙ではあるが、日立沖バチコンアジングの魅力を見事に表していた。



◀船中1尾目のアジは
タカハシゴーがゲット

ツリガチ!

茨城県日立沖の バチコンアジング

文◎高橋剛

★「アジをあなどるべからず」は、ツリガチ取材班の合い言葉である。だが日立沖のバチコンアジングで巡り会ったアジは、あなどるどころか、とんでもない迫力だった。スリリングさにかけては、ライトゲーム随一。しかも、想像以上にイージー。関東圏のアジ釣りが、今、新たな次元に突入しようとしている!



都心から140キロほど離れた茨城県日立久慈漁港に集う男ども空を眺め、海を眺め、船着き場で静かに揺れる釣友丸を眺めては、気合を高めている。それぞれ、複数のタックルを抱えている。竿は細身で、スピニングリールもベイトリールも小型だから、巨大魚狙いというわけではなさそうだ。だが、空気は張り詰めている。ライトな装備の割に、ものものしい雰囲気である。「よし」「うし」「おし」活を入れ、釣友丸に乗り込んだのは、ツリガチ取材班の面々だ。いつもお気楽にテキトーなトークを繰り広げてはバカ笑いする連中だが、今日は少しばかりガチな面持ちである。ヨッシーこと吉岡進プロ、その釣友としてほほレギュラーメンバー化しているイチロウこと鹿島一郎さん、そして万年ビギナーの座を不動のものとしているライターのタカハシゴー。「じゃ、出発しますね」と、若船長の若林一さんが船を出した午前4時45分、梅雨明けの朝日はまだ柔らかかった。とろん日立沖はベタナギだ。とろん

とした滑らかな海が、男どもを出迎える。港を離れ20分ほどして減速すると、総員の目が緊張と輝きを増した。いよいよだ。行くぞ。待ってる、アジ!そう、今回のツリガチのターゲットは、日立沖のアジである。出迎える。港を離れ20分ほどして減速すると、総員の目が緊張と輝きを増した。いよいよだ。行くぞ。待ってる、アジ!そう、今回のツリガチのターゲットは、日立沖のアジである。

ゲットは、日立沖のアジである。しかし、ただのアジではない。40センチを超えるギガアジを、ライトなタックルのバチコンアジングで釣ろうというのだ。そりゃあ気合も入り、緊張感も高まるというものだ。県はコマセ釣りが禁止されている。その分、ソフトルアーを始めとするルアーにアジがよく反応する。釣友丸のアジ船も、バチコンアジング、SLJ(スーパーライトジギング)、そしてサビキ釣りもOKのフリースタイル。新しいアジ釣りのかたちとして注目を集めている。このあたり、詳しい経緯については本誌7月15日号「釣具店の独り言」第37回でジャイアント水戸南店・大山雅幸マネージャーが書かれているので、ぜひご参照いただきたい。バチコンアジングを茨城の新しい釣り物として盛り上げていくという意気込みがたっぷり詰まった記事だ。……ということつまり、日立沖のバチコンアジング盛り上げのために、我われは成果を出

当日のアジ船で見つけた 日立沖のアジ釣りで 〇〇しがちなシーン



ソフトルアーがズレがち

▲誘いを入れたあとにアタリがきて合わせるがハリ掛かりしなかった。仕掛けを回収してチェックするとソフトルアーがズレていた

食事をしながら釣りをしがち

▶日立沖のバチコンアジングの魅力にハマるタカハシゴー。食事の時間も惜しくなり、パンを食べながら釣りをする



デカイアジを釣ると計測しがち

▲イチロウが釣り上げたアジを見て、「計ってみよう」と提案するタカハシゴー。40センチまであと1センチ、おいしい!



ベイトに合わせてソフトルアーのカラーを替えがち

▲タカハシゴーが釣り上げたオキメバルの口の中にアミがびっしり。コレを見たヨッシーはアミを模したラメ入りのカラーにチェンジし、すぐにアジを釣り上げた

ソフトルアーが散乱しがち



▲ソフトルアーのサイズや形状をチェンジしたり、カラーをローテーションさせていると散らかっていく

水分補給を忘れがち



▲釣りに夢中になると水分を取ることを忘れがちに。熱中症予防のために水分補給をこまめにしよう



▲日立沖の大アジの引きを堪能し、ご満悦のヨッシー

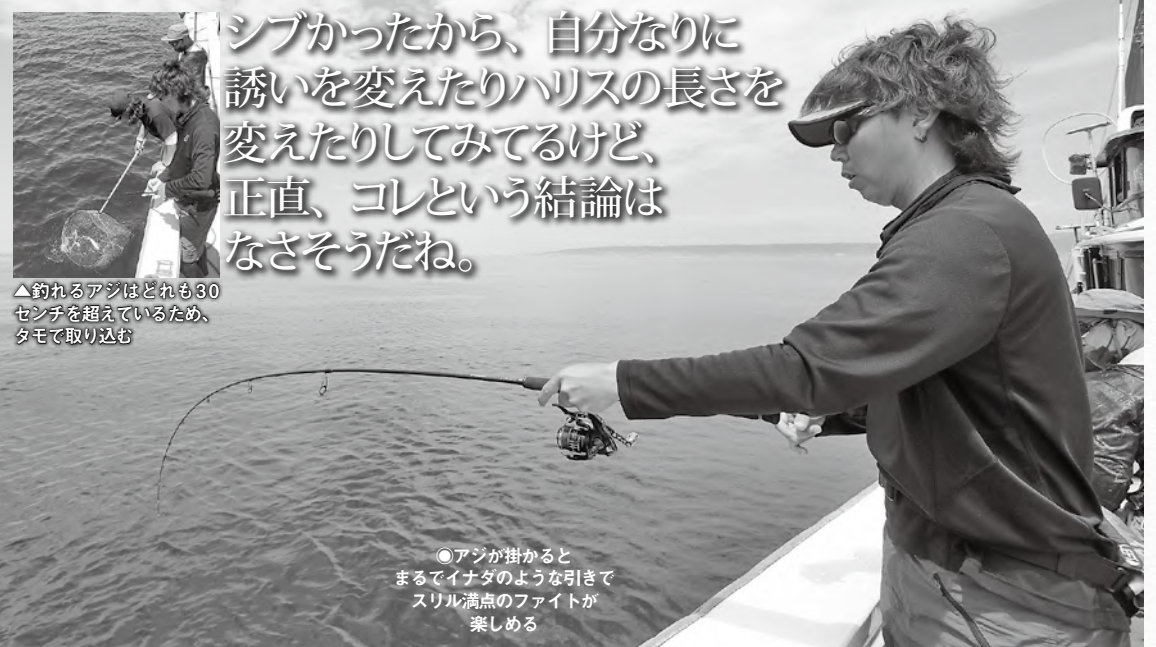
「いい反応は出てくるけど、今日はなかなかか口を使ってくれませんか……。でもいいときは、40〜50尾ぐらいは当たり前のように釣れるんです。しかもフォールで食ってくるから、難しいアキションもいらぬ」
息を飲む、ツリガチ取材班。
「ゴクリ……」
「これだけ引きの強い良型アジが……」

あるってことなんだよね」
冷静に分析するヨッシー。
「シブかったから、自分なりに誘いを変えたりハリスの長さを換えたりしてみてるけど、正直、コレという結論はなさそうだね。むしろ食いの気のあるアジさえいれば、ゴーさんでも釣れる……ってことは、だれでも釣れることは間違いない(笑)。
30メートル前後とちょっと深いポイントで勝負をかけるなソフトルアーで勝負をかけるバチコンアジングと聞くと「かなりトリッキーで難しい釣りかな」と思う人も多そうだけど、



▲アジの活性が上がるとダブルヒットになる一幕も

「40〜50尾……」
そしてイチロウが発見した「フォールでのアタリが多い」は、まさしくこの海域でのバチコンアジングの特徴だったことが、一船長の口から明らかとなったのである。
終盤、イチロウはスパートをかけた。フォールの釣りアジとオキメバルを連発し、にんまりだ。ヨッシーがハナダイ、タカハシゴーが34センチの尺超えメバルを釣ったところで正午を回り、沖揚がりとなった。
アジは3人合計で11尾とまさにシブかったものの、とにかくサイズがいいので、クーラーはたっぷり充実していた。
ヨッシーも満足げだ。
「最後、鹿島さんが連発したのは、フォールというだけじゃなくてソフトルアーの色も関係あったみたいだね。潮が澄んでいたのでだと思っけど、ナチュラルカラーであるイソメグロークラッシュへの食いがよかった。一船長いわく「45センチも釣れる」ということだから、掛けてからのスリリングさはたまらない魅力。でもやっぱり、「どう食わせるか」も大事……」
平均サイズが尺オーバーの日立沖のバチコンアジング、釣りの魅力が凝縮されてるよ!



シブかったから、自分なりに誘いを変えたりハリスの長さを変えたりして試してるけど、正直、コレという結論はなさそうだね。

▲釣れるアジはどれも30センチを超えているため、タモで取り込む

●アジが掛かるとまるでイナダのような引きでスリル満点のファイトが楽しめる

ナギの日立沖に、ツリガチ取材班の嬌声が響く。アジの引きは本当にアグレッシブで、イナダとヤリトリしているかのようだから、1尾1尾の充実度がすごい。大きなアジがタモに収まったときの歓声は、大物釣りに負けていない。
「まあ、今日はちょっとシブいようだけだね」と、ヨッシー。
「食ってくるときはみんな一斉にバタバタとアタるけど、それほど長くは続かない。難しい

釣りの魅力が凝縮されている 日立沖のバチコンアジング

「でさえも、「うひょ〜」「たまんね〜」と雄叫びを上げながら、ポツリポツリとナイスサイズのアジを上げていく。
意外にも苦戦していたのは、手練れのイチロウだ。アタリはある。何度もバシバシッと合わせるものの、うまくハリ掛かりさせることができない。
「うーん」とか「あつ」とか言いながら1尾目のアジをようやく釣ったのは、開始から3時間ほど経過後からだった。
アジの口元には、1グラムの小型ジグ、ジャツカル・ナノドロップがあった。ソフトルアー+ジグヘッドと同じような感覚

で使えるスーパーライトメタルジグだ。
「色いろやってたら、フォールへの反応がよかったので……。ジグヘッドより重めのナノドロップを使ってみたら、ようやく釣れましてよハハハ」
水深はおよそ40メートル。底から20メートルの中層で掛けた貴重な1尾だった。これを機に、イチロウも加速する。試行錯誤でつかんだコツが正解だったことが、後に明らかになる……」



▲ナノドロップでアジを上げたイチロウ

日に当たっちゃったみたいだね。ただ、アタリが遠のくとアジを探してポイントを巡るランガンスタイルだから、竿を出しているコチラ側としては飽きがこないよね」
積極的に流し変え、ソフトルアーに反応するアジを追い求めてポイントを探し続ける、一船長。船が止まり合図が出た直後の1投目が最も食ってくる可能性が高いことが判明し、ツリガチ取材班は船の減速と同時にサ

ッとオモリを持ち、スキなく投入体勢を取るようになった。釣り味が本当にスリリングで楽しいから、アタリが遠くても常に高いモチベーションをキープできるのだ。
「フリースタイルっていうのいいよね」とタカハシゴー。お仕着せを嫌う彼は、自由という言葉に弱い。
「今日はバチコンアジングだから」とストイックにソフトルアーで粘るヨッシーを横目に、SLJでオキメバル、ジャツカルのジグサビキ「SLJサビキ」でアジと、落ち着きなく色いろな釣り方で楽しんでいる。
「ゴーさんが色いろやってても釣れること分かるのは、この釣り、だれにでもチャンスが